

論文

観光と異文化間コミュニケーション—

創造的翻訳への理論的取組*

Tourism and Cross-cultural Communication — Theoretical Approach to Creative Translation

竹鼻 圭子、戸塚 敦子

Keiko Takehana, Atsuko Totsuka

和歌山大学観光学部

キーワード：創造的翻訳、異文化間コミュニケーション、観光産業、多次元構造、世界遺産

Key Words : digital camera, time-lapse photography, scenery, starry sky

Abstract :

This paper aims at the clarification of features in cross-cultural communication. We propose a theoretical approach to creative translation. This attempt is crucial for empowerment of tourism in Japan, where the Tourism Agency of its central government was launched in October 2008 for that purpose. A case-study is exercised on the world heritage site of “Sacred sites and pilgrimage routes in the Kii mountain range” in the light of the multi dimensional structure of language. The analysis reveals a superficial understanding of language in the practice of cross-cultural communication. The education and understanding of language and linguistics is at stake in the industry of tourism in Japan.

Keywords: Creative translation, Cross-cultural communication, Industry of tourism, Multi dimensional structure, World Heritage

1. はじめに

ユネスコ世界文化遺産として登録されている紀伊山地の霊場にある高野山を弘法大師空海が開山して1,200年が経とうとしている。増え続ける外国人観光客への対応として、当然、外国語の資料・案内等が求められるようになる中、言語・文化の違いを踏まえた対応の重要性を示す些細ではあるが象徴的な事象が「高野開創伝説」の英訳で起きた。

丹生都比売大神の御子であり高野御子大神の化身である獵師が2頭の犬を連れて山中に現われ空海を高野山へと導いたという物語である。このことを英訳した英文パンフレットの中に2頭の犬を“two headed dog”(頭を2つ持った犬)と訳したものがあった。双頭の犬ということになる。“頭”がこの場合序数詞であること、“犬”が日本語の場合単数とも複数とも形式上見分けがつかないことが間違った翻訳の主たる原因であると考えられるが、加えて、文化の違いから生じる感覚的な差異もその原因であることを認識する必要がある。

その物語では獵師と共に空海を導いたのは白い犬と黒い犬の2頭ということであり、「2頭の犬」を普通の文脈で「頭

を2つ持った犬」とは解釈しない。ところが、これを翻訳した人物が欧米人、或いは、欧米文化に親しんだ人物であり、古くは神聖ローマ帝国・ロシア帝国ロマノフ朝・オーストリア帝国などの紋章に描かれていた“双頭の鷲”やヨーロッパの伝説に登場する“双頭のドラゴン”のイメージを抱く人であったと仮定すると、“2頭”から“two headed dog”を連想したことのメカニズムが窺える。これが、文化の違いから生じる差異であり、観光の更なる国際化・グローバル化、そして、日本が国策として掲げた海外から日本を訪れるインバウンドの観光客を増やすというゴール達成の為には必ず克服しなければならない重要な課題であると言える。

この“双頭の犬”のようにはっきりと誤訳とわかる場合は、その事に気づいた時点で、生じた誤解・間違いを正すことが容易なケースであると言える。問題となるのは、言葉自体の翻訳としては、ある意味で間違っていないのだが、文化的背景の違いから、その言葉では本来の意味が通じないというケースである。そして、そのような事象が多々起きることこそ問題の本質がある。

2008年10月に観光庁が設立され、日本の観光立国が本格化された。観光庁が方向として定めた「憧れの国・日本」という観点からのインバウンド観光客獲得を図る上で、外国語、特に英語を通じてより広く、より深く日本を海外にアピールする効果的なシステム・方法を確立することが急務であることは言うまでもない。また、日本独自の観光学を構築し日本で学ぶことを望む留学生の獲得（教育分野におけるインバウンドの獲得）と云う観点からも、日本が提供できるもの（精神・文化・知恵・技）の価値を外国人に外国語で伝え、理解させる方法論を確立することは、観光を研究する機関である和歌山大学・観光学部にとって重要な課題である。

その第一歩として、言語学的に見てどのような意味合いでの誤謬が生じうるのかを明らかにすることは今後の取り組みに大きく寄与するだろう。

本稿では、まず竹鼻（1992）を振り返って、言語の多次元的構造を明らかにする。言語が多次元的構造をもつということで、異文化間の伝達において各領域に注意が払われなくてはならないことが予測される。次にユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の場合を例にとって、その解説にどのような問題が生じるのかを言語学的に明らかにする。このような専門的分析を加えることが、掴みどころが無いと言われる観光という分野を学問領域として確立してゆく上で不可欠なステップとなる。

観光という場合、特に国際的な観光を考える場合、異文化から発信される情報の受け手に興味を抱かせることが肝要であり、そのためにはこれまでの単なる翻訳技術ではカバーできない、新たな考え方や技術・アプローチが必要であり、そのような企画力を持った人材育成こそ急務であることも明らかにしてゆきたい。また、このような試みから創出される翻訳システムを「創造的翻訳」"Creative translation"と名づけ、今後のシステム構築の礎とする。

2. 言語の多次元的構造と観光

山崎正和は『社交する人間』（2006）において人間が行動を定式化（リズム化）して生きる生活を自然、文化、文明の3段階として捉えた（第九章「社交と文化、文明」参照）。そして、「一端が自然に発し、他の端が文明化の極に達して、その間に広大な文化の領域を形成しているものといえ、それは何よりも言語である。」（同p. 284）と述べて、言語の多次元的構造を示唆する論評をしている。山崎も学者であると同時に劇作家でもある。このように言語の多次元的構造は文芸の分野から指摘されることがしばしばであった。

竹鼻（1992）でも、山中（1985）の「文体論」から論を起し、言語の多次元的構造を「自然言語の巨視的構造」として言語学の視点から全体像を明らかにした。結論からいえば、言語は図1にあるような様々な領域から構成される多次元的構造を持ち、観光という文脈では、全ての領域が「変項」

として捉えられることになる。つまり、観光という異文化接触を最大の要素とする現象にあつては、通常の言語活動では「定数」であるはずの領域が「観光変数」によって作用される変項と考えられなければならないのである。ここでいう「観光変数」とは言語の各領域における観光文脈での異文化間コミュニケーションに生じる、調整を必要とする異質性を意味する。本節ではそこに至る議論を確認する。



図1 言語の多次元的構造と観光変数

2.1 自然言語の構造について

自然言語は我々をとりまく記号体系の一部を担うものである。その立場に立てば、構文論、意味論、機能論の全てを満たして初めて自然言語が明らかにされたことになる。ここでは、これまで言語学、哲学、論理学、コンピューターサイエンス等の立場から明らかにされてきた知識が統合された場合、観光という文脈で、自然言語の全体構造がどのようなものとなるかを考える。このような試みは、認知科学あるいは認知言語学と呼ばれる学問が、本来的にその目的の一つとするものであろう。というのは、認知言語学がめざすものは、言語の諸事象の説明ではなく、本来、人間の知に根ざす言語の本質を究めることにあるからである。かつて構造言語学者は科学の名のもとに、観察され得る言語事象のみをその説明の対象としようとした。この方法論の限界を打開すべく、チョムスキーは普遍文法の究明という目的をたて、構文論的には多くの成果を取めた。しかし、彼の方法論によって明らかにされたものだけでは、自然言語が再現され得ないことは、コンピューターサイエンスの成果に明らかである。ここに至って、人間の知とは何か、言語とは何かということが、認知科学

の名のもとに、真剣に追求されるようになった。すなわち、1960年代初期の権文論に根ざす機械翻訳の惨敗の結果、人間の知や言語の複雑さが強く認識され、またその解明無しに、人工知能による言語の再現はあり得ないことが認識されたわけである。現段階では、科学者たちは構文論に欠けていた部分を補足するという方向性のもとに、概念構造や談話構造を研究しており、他方哲学者は、意味論、語用論の基本原則をめぐって思索を進めてきている。この二つの方向性の間にはまだまだ大きな溝が方法論的にも問題意識の面にもある。その間にあって、言語学者は各々の方法論の言語事実との照合に忙しく、未だ独自の展望を模索するきっかけをつかめないでいる。

2.2 自然言語の構造の拡大

2.2.1 拡大する構造

構造を持つ物として自然言語を研究する立場を明確な形で提唱したのは、周知の通り構造言語学者たちであった。しかし、その偉大な発想にもかかわらず、科学的であろうとするあまり、分析対象を表面に表われた文に限ったため、音韻論ではかなりの成果を上げたものの、意味論は切りすてられ、既にその目標とした統語論においてさえ、大きな陪礁に乗り上げていた。チョムスキーの生成文法はこの限界に一つの突破口を開いた。すなわち、文を、構造主義の単一構造では無く、関連しあう複数の構造で示そうとした。

この生成文法のモデルでは、意味論は論理式を接点としてその存在を許されるにとどまり、語用論の情報はむしろ意図的に削除されている。この点については、この文法理論のごく初期より、機能主義者（久野等）や哲学者（アーベル、ウンダリツヒ等）からの批判があった。そして機能的視点からの文法理論や、オースティン、サール等による発話行為論が研究されてきた。また、生成文法の流れの内でも、最終的には不成熟に終わったが、生成意味論のように、意味論まで文法構造を拡大しようとする試みや、遂行文仮説（ロス）のように、発話行為を統語構造に組み込み、語用論にまで言語の構造を拡大する試みがあった。こういった、哲学者や文法学者の試みが蓄積されるに至って、リーチも述べているように、「どの特定の学者から始まったか確認するのが困難といった形で」（リーチ（1987）p.6）、より包括的なパラダイムの形成の端緒が得られるようになった。リーチは、意味論と語用論とを相補的なものとして捉え、言語を音韻論と統語論、意味論からなる文法部門と語用論から構成されるとした。また、語用論は対人関係の修辞（インプットへの制約）とテキスト形成の修辞（アウトプットへの制約）から構成される。

しかし、リーチ自身、より包括的パラダイムを目的としていたにもかかわらず、自然言語の全体像についての言及は、前述の段階にとどまり、以下は主に「対人関係の修辞」、すなわち、グライス以来の会話の原理、原則の充実に力点を置いて

ている。またその分析は、狭い意味での文法的概念である否定文や疑問文を、上記の枠組みで説明するという方向に向けられ、生成文法で示されたようなダイナミックな言語モデルを語用論のレベルまで拡大したものであるというには、今一步、包括性、精密性に欠ける。要するに、我々が最初に考察した、「認知科学」的視点の未成熟なパラダイムとなっているのである。それはリーチの視界が、言語学的にも哲学的にも、発話行為についての研究に限られていたことに由来する。すなわち、認知科学により拡大された言語研究の地平や、生成文法のごく初期から、補完されるべきものとして提唱されてきた実用論的、社会学的地平に欠けているわけである。それでは、認知科学や社会言語学が自然言語の巨視的視野を持つに至ったかと言えばそうでも無い。認知言語学については、既に述べたように、構文論の肉づけ以上にまでその精密な方法論を拡大できないでいる。他方、社会言語学は言語学において問題となっている諸事象（語彙、構文、発話行為、談話構造、等）を社会的コンテキストで説明する段階にとどまり、ハドソンの言う自然言語のプロトタイプを確立するには至っていない。

2.2.2 認識されるべき問題点

次に、自然言語のモデルを、より包括的かつダイナミックなものにしようとする場合、導入されるべき方法論を示し、認識されるべき問題点を具体的に挙げてみたい。

まず方法論であるが、リーチ（1987）が「対人関係的修辞」や「テキスト形成的修辞」として語用論を捉えようとした場合に意識された「修辞学」的考え方を、よりダイナミックな形で導入するべきであろう。我々が修辞と呼ぶものは、アリストテレス以来の修辞学の成果を指す。このような視点の導入は、メタファーの研究等に既に表われていた。すなわち、日常的言語使用とは異なるものとして位置づけられていた「修辞」（メタファーもその一部としてあった）が、究極的には、日常言語そのものに広いすそ野を持っており、そこから生まれたものであるという我々の認識である。そこで我々は、言語芸術をその対象とする修辞学の成果をもとに、それを自然言語全般に当てはめて考えてみるという作業を進めてゆく。

まず、修辞学とはどのような歴史を持つのであろうか。山中（1985）によれば、修辞学はアリストテレスの詩学と弁論の二つの系統があったと言う。すなわち、詩学が創作の一般理論として、一方方弁論術が言語産出の「過程的モデル」として発展し、後者が後の修辞学の母胎となった。修辞学は「言語化」（＝発想→配列→表現）と「公表」（＝記憶→発表）とから構成される。この内、発想部門は論理学にゆずり渡され、修辞学は配列部門の一部と、表現部門とからなる、最末期には規格はずれの言いまわしだけを対象とする学問へと狭隘化していった。

しかし、生成文法に代表される産出モデルが発達し、テク

スト構造へ注目が向けられ、そして、言語研究そのものが論理学や心理学と結びつくに至って、より包括的な理論体系として、アリストテレスの詩学の掲げた目標を現代に活かす試みがなされるようになる。記号論の枠組みのなかで言語（芸術）テキストを捉えようとする企てが現われてきた。こういった新しい詩学にもとづき山中（1985）のモデルが作られた。そして、このモデルをもとに図1の言語の多次元構造的各領域が構成されている。

だが、このモデルはあくまでも言語芸術、あるいは文学的伝達を対象としたものであった。したがって、我々の目ざす日常自然言語のモデルを考える場合、比較的その位態づけの容易な構文論（統語論）に始まり、スキーマ、スクリプト等の概念や、グライスの会話の原理原則、あるいはリーチの対人関係の修辭やハリデイのテキスト形成的修辭の位置づけが大きな課題となる。また社会言語学の成果もその視野に入れるべきであろう。すなわちハドソン（1980）が述べているように、「どのような観点から言語を研究するにしろ研究者全員が自分の研究主題の社会的脈絡をもっと強く認識すべきであり、」（（訳）1988, p. 14）少なくとも言語変種、言語的相対性、社会的相互行為としてのことば、言語変項、言語学的不平等など、社会言語学で問題となっている点が、言語モデルの内でのどのような位置をしめるのかということ、考察されるべき課題である。

2.3. 言語の多次元構造的と観光変数

ところで、山中（1985）のモデルはあくまでも言語芸術のモデルであり、日常自然言語のモデルとは異なる面を持つことは明らかである。他方、リーチのモデルは、文法に付随する言語事実の説明をその射程としているようであり、自然言語の全体像を捉えるには、包括性に欠けることは既に指摘した通りである。ここではこれまでの考察をふまえ、言語の多次元構造的の由来を明らかにする。すなわち、山中のモデルに集約される文学的伝達のモデルを日常自然言語にあてはめた場合、生成文法に代表される構文論、意味論まで視野に入れた認知言語学、グライスの会話の原理から発展したリーチの対人関係の修辭やハリデイのテキスト形成的修辭に代表される語用論、そして社会言語学の成果等がどのように位置づけられるのか考察されなければならない。また、観光という文脈の中で「変数」として何を捉えるべきか明らかにする。

話者の性格、社会的地位、年齢、男女差、地域差、国民性等によって談話タイプが異なってくることは、社会言語学者ばかりでなく、リーチも対人関係修辭の原理原則の比重のゆれに観察している。たとえば、たとえば日本人は丁寧さの原理を優先させる傾向にあることが指摘される。リーチは言語モデルにこのことを位置づけることは無かったが、山中モデルの「作者側の前提」に位置づけられよう。社会言語学

ではこういった要素を変項と呼び、その変項に値が決められたもの、すなわち特定の話者によって話される談話のタイプをコードと呼んでいる。こういった社会的要素が話者の前提ばかりでなく、受信者の評価に伴う話者の自己確認や自己同一化を通じて談話タイプの選択に大きく関与してくる。たとえば、ある発話が「慣々しい」とか「よそよそしい」とかいった評価は、多分にこのような自己確認や自己同一化によるコード選択のずれに由来するからである。

もう一点、社会言語学の成果の中で、言語の多次元構造的の視界に入れておくべきものがある。それは、言語伝達に付随あるいは平行する非言語行動についてである。話者と聴者間の距離等で表わされる関係標識、目の動き等で次の話者を決める（ターンテイキング）構造標識、うなづくことで是認を表わしたりする内容標識等が日常言語では大きな意義を持つ。このような言語に即した意義ばかりでなく、我々の行動全般が何らかの意義、あるいは意志を表わすことは良く知られている。とりわけ「以心伝心」を旨とする国民性を持ってきた我々日本人にとっては、このことは理解に難くない。言語は、非言語行動をも含めた我々をとりまく記号体系（人間の認知によって作り出された世界）の一部を構成するものであるとの認識が重要であろう。また観光という文脈においては、各言語の個別文法（統語論、意味論、音韻論）の違いを認識するだけでは足りない。言語を構成するすべての領域において変数、すなわち調整を必要とする異質性が作用することを理論的に明らかにすることが重要である。各変数は既に図1において示した。この変数がどのような内部要素から構成されるかは今後の課題である。また、このような観光変数を視野に入れた翻訳の方法論を「創造的翻訳システム」として確立を目指す。

3. 創造的翻訳システム：世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の場合

ここでは、言語の多次元構造的を念頭において、実際の異文化間コミュニケーションの現場での問題点を創造的翻訳システムの観点から明らかにする。ここに取り上げるのは世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する記述である。丹生都比売神社公式ホームページ（日本語）（<http://www.niutsuhime.or.jp/goyuisho.htm>：2009年3月31日現在）から「ご由緒」と和歌山県の世界遺産公式ホームページ英語版（http://www.pref.wakayama.lg.jp/sekaisan/english/e-koya_e.html：2009年3月31日現在）から高野山に関する文章 Sacred Site, "Koyasan" を引用してそれぞれ問題点を明らかにする。前者和文はごく一般的に見られる説明紹介文である。後者の英文には本稿の冒頭に挙げたような明らかに誤った表現があるわけではない。つまり、図1の「個別文法」の領域については正確な伝達がされている。しかし、異文化間コミュニケーションという視点から見たとき、言語学の

丹生都比売大神の御子、高野御子大神は、密教の根本道場の地を求めていた弘法大師の前に、黒と白の犬を連れて狩人に化身して現れ、高野山へと導きました。弘法大師は、丹生都比売大神よりご神領である高野山を借受け、山上大伽藍に大神の御社を建て守護神として祀り、真言密教の総本山高野山を開きました。これ以降、古くからの日本人の心にある祖先を大切に、自然の恵みに感謝する神道の精神が仏教に取り入れられ、神と仏が共存する日本人の宗教観が形成されてゆきました。

視点から見て、何が問題なのかを明らかにしたい。

日本語文章の次の部分に注目したい：

この神仏が合祀されるこの状況は明治の神仏分離まで続いた。

この内容は英文では以下のように表わされている：

Niutsuhime-jinja, which is situated in the Amano basin lying halfway between Kongobu-ji and Jison-in in dedication to the deities Niumyojin and Koyamyoin, who in legend gave land to Kukai for the construction of Kongobu-ji and guided Kukai, respectively.

なるほど、神社の領地が空海に貸し与えられたという事実は書かれている。しかし、広く世界に目をやると2009年3月のこの時点でもパレスチナではイスラム教徒とユダヤ教徒の争いが世界の関心を集めている。異なる宗教がお互いを尊重し合って何百年も共存するという状況は稀有なのである。事実、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に推薦された大きな動機は、この神仏の共存であったと言われている。このことを伝えてこそ、日本文化を異文化に伝えたことになる。

では図1の言語の多次的構造のなかで、いったいどの領域が視野に入れられていなかったのだろうか。まず、「コンテキスト、共通認識、スキーマ、スクリプトなど」の領域では宗教などの背景文化に関して検討されていない。また、「伝達、作用：ゴール」の領域では正に異文化に対して何を伝え、何をもちて伝達のゴールとするのかの検討がない。そして、「話者：コード」「受け手：コード」の領域では、異文化間での様々な「変更」が考慮されていない。つまり、言語の持つ多次的な構造のうち、非常に限られた範囲のみを視野に入れた伝達になっていることがわかる。各々の文化の言語表現の持つコードに関するデータの蓄積と分析が必要であり、「観光変数」としての体系化が急がれる。言語に関する深い知見をもとにした取組が求められ、創造的翻訳システムが必要とされる所以である。次に各引用箇所について観光の文脈での異文化間コミュニケーションの視点から見たときの問題点を考察する。

3.1 丹生都比売神社公式ホームページ（日本語）「ご由緒」

全体として、観光の文脈から見たとき、たとえ日本語で

あっても異文化間コミュニケーションの視点からの検討が必要である。観光の文脈では翻訳されることを前提とした日本語の構成が求められる。また、各段落については次のような問題点が挙げられる。

起源について：「1700年前」という時代の位置づけの理解が困難である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

紀ノ川より紀伊山地に入り標高四五〇メートルの盆地天野に当社が創建されたのは古く、今から千七百年前のことと伝えられます。天平時代に書かれた祝詞である『丹生大明神祝詞 にうだいみょうじんのりと』によれば、丹生都比売大神は天照大御神の御妹神さまで稚日女命 わかひるめのみこと とも申し上げ、神代に紀ノ川流域の三谷に降臨、紀州・大和を巡られ農耕を広め、この天野の地に鎮座されました。

古事について：「神功皇后」だけでは背景の理解が困難である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

また、『播磨国風土記』によれば、神功皇后 じんぐうこうごう の出兵の折、丹生都比売大神の託宣により、衣服・武具・船を朱色に塗ったところ戦勝することが出来たため、これに感謝し応神天皇が社殿と広大な土地を神領として寄進されたとあります。

名前の由来について：この説明では「丹」が社会的にどのような意味をもっていたかが分からないので、重要性の理解が困難。水銀の産業、経済、社会的重要性の説明が必要である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

ご祭神のお名前の「丹」は朱砂の鉱石から採取される朱を意味し、『魏志倭人伝 ぎしわじんでん』には既に古代邪馬台国の時代に丹の山があったことが記載され、その鉱脈のあるところに「丹生」の地名と神社があります。丹生都比売大神は、この地に本拠を置く日本全国の朱砂を支配する一族の祀る女神とされています。全国にある丹生神社は八十八社、丹生都比売大神を祀る神社は百八社、摂末社を入れると百八十社余を数え、当社は、その総本社であります。

高野山との関係について：世界の宗教事情との差異の説明が必要。神道と仏教という2つの宗教が共存している事情が珍しい事象であることの説明が必要である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

丹生都比売大神の御子、高野御子大神は、密教の根本道場の地を求めていた弘法大師の前に、黒と白の犬を連れて狩人に化身して現れ、高野山へと導きました。弘法大師は、丹生都比売大神よりご神領である高野山を借受け、山上大伽藍に大神の御社を建て守護神として祀り、真言密教の総本山高野山を開きました。これ以降、古くからの日本人の心にある祖先を大切に、自然の恵みに感謝する神道の精神が仏教に取り入れられ、神と仏が共存する日本人の宗教観が形成されてゆきました。中世、当社の周囲には、数多くの堂塔が建てられ（明治の神仏分離まで当社は五十六人の神主と僧侶で守られてきました。

また、高野山参詣の表参道である町石道の中間にある二つ鳥居は、神社境内の入口で、まず当社に参拝した後高野山に登ることが慣習でした。

現代までの歴史について：「舞楽法会」が注目すべき現象であることの説明が必要。神事としての舞楽と仏事としての法会の融合が珍しい事象であることの説明が必要である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

鎌倉時代には、行勝上人により気比神宮から大食都比売大神、巖島神社から市杵島比売大神が勧請され、社殿が北条政子により寄進され、本殿が四殿となり、このころから舞楽法会が明治のはじめまで盛んに行われます。現存する本殿は、室町時代に復興され、朱塗りに彫刻と彩色を施した壮麗なもので、一間社春日造では日本一の規模を誇り、楼門とともに重要文化財に指定されています。

尚、平成十六年七月「紀伊山地の霊場と参詣道」の丹生都比売神社境内として世界遺産へ登録されました。

3.2 和歌山県の世界遺産公式ホームページ英語版：Sacred Site, "Koyasan"

聖地としての高野山の説明であるが、全体として英語で表現する意義が確認できない内容である。本来の世界へ向けて発信するという意義を持つには、たとえ解説文であっても、人々に訴える何らかのストーリー性が求められる。

重要建造物の紹介について：それぞれの建造物の説明とい

うスタイルをとったために、それぞれの項目はなるほど分かりやすいが、関連性の理解が困難になっている。同ホームページ日本語版 (http://www.pref.wakayama.lg.jp/sekaiisan/koya_e.html：2009年3月31日現在)はストーリーになっているので、それを生かした翻訳作業が必要である。

関連する観光変数：話者コードや受け手コードの国民性、地域などの観光変数。

コンテキストや共通認識に関する観光変数

談話タイプやテキストタイプに関する観光変数

In an alpine basin at an altitude of 800m there stand a group of important compounds: (1) Kongobu-ji, which was founded by the high Buddhist priest Kukai in 816 as the principal stage for the Shingon sect of esoteric Buddhism, (2) Jison-in, which was constructed as an administrative office to facilitate the construction and management of Kongobu-ji, (3) Niukanshofu-jinja, which was constructed as a guardian shrine to protect the Niukanshofu estate of Kongobu-ji, and (4) Niutsuhime-jinja, which is situated in the Amano basin lying halfway between Kongobu-ji and Jison-in in dedication to the deities Niumyojin and Koyamyojin, who in legend gave land to Kukai for the construction of Kongobu-ji and guided Kukai, respectively. Those shrines and temples are connected by the pilgrimage route known as the Koyasan Choishimichi.

現在の様子について：この部分はストーリー性があり、読者をひきつけることができている。空海が高野山を開いた9世紀という時代についての理解を助ける工夫があればより理解が容易になる。

関連する観光変数：コンテキストや共通認識に関する観光変数

At Koyasan, there are 117 temples still remaining at the present time, forming a mountaintop religious "city" which embraces a history of more than 1,200 years as a sacred mountain site. This site combined with the surrounding steep mountain ridges and deep forests produce a religion-related cultural landscape. Okuno-in, which is revered as the sacred area where Kukai still lives after having attained Buddhist enlightenment, holds many tombstones, more of which are still now being added by those who admire Kukai's teachings.

4. むすび

観光庁設置により「観光立国」の姿勢をより鮮明にした日本政府は、その政策の進め方にも明らかに具体性を示してきた。観光を学問し、観光産業の担い手を育成する和歌山大

学観光学部としても、観光学と観光教育に関する具体的な方法論を示す必要がある。

本稿では言語学的に見て観光の文脈において、どのような意味合いでの誤謬が生じうるのかを明らかにした。言語を通じて異文化間で何をどのように紹介し、その価値と感動をどう伝えるのかという方法論確立への扉を開くことで、「観光立国」の柱となる「憧れの国・日本」のイメージ構築への具体的なステップとすることを目的としている。今後は、言語学に基づく文化的観点から観光を分析する新分野の開拓をし、創造的翻訳 (Creative translation) システムの構築を目指す。

注

* 本稿はNew Heritage Tourism: Global Perspectives Conference, University of Central Florida, Rosen College of Hospitality Management, January 22-24, 2009 において” Policy Issues in International Heritage Tourism---With a special reference to Sacred sites and pilgrimage routes in the Kii mountain range in Japan” のタイトルで戸塚敦子特任教授、東悦子准教授とともに発表する予定であった原稿の、竹鼻圭子、戸塚敦子分担箇所をもとにしたものである。上記学会は、今般の深刻な経済状況のために延期となった。

参考翻訳作業：竹鼻圭子が共訳あるいはチームリーダーとして関係した翻訳

- (1) 『マンデヴィルの旅』(共訳) 1997. 英宝社: *The travels of Sir John Mandeville*, 14世紀英語版写本.
- (2) 『人のためのコンピュータデザイン—ヒューマン・コンピュータ・インターフェース入門』(共訳) 2003. 英宝社: *The Essence of Human - Computer Interaction*, Christine Faulkner, 1998, Prentice Hall Europe.
- (3) 「アメリカ人、Shoki (鐘馗) と出会う」『大手前大学人文科学部論集』第4号65-79, 2004. : *An American encounters Shoki*, Daniel Wilcock (manuscript).

参考文献

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Hudson, R.A. 1980. *Sociolinguistics*. London: Cambridge U.P. (『社会言語学』1988. 松山幹秀, 生田少子 (訳), 未来社)
- 井口省吾 (編訳) 1976. 『チョムスキーと現代哲学』, 大修館.
- 今井邦彦 (編) 1986. 『チョムスキー小事典』, 大修館.
- 久野暉 1978. 『談話の文法』, 大修館.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman (『語用論』1987. 池上嘉彦, 河上誓作 (訳), 紀伊國屋書店)
- 野村浩郷, 田中穂積 (編) 1988. 『機械翻訳』, 共立出版.
- 鈴木光男 1999. 『ゲーム理論の世界』, 勁草書房.
- 竹田茂夫 2004. 『ゲーム理論を読みとく』, ちくま新書.
- 竹鼻圭子 1992. 「自然言語の巨視的構造」, 『成田義光教授還暦祝賀論文集』, 英宝社, 427-440.
- 滝浦真人 2006. 「単位で捉えられるもの, 捉えられないもの—『ほめかし』とボライトネス」, 『言語』Vol.35/No.10, 74-81.
- 戸田正直, 阿部純一, 桃内佳雄, 往住彰文 1986. 『認知科学入門』, サイエンス社.
- 山中桂一 1985. 「文体論」, 池上嘉彦 (編) 『意味論・文体論』, 英語学コース4, 大修館.

山梨正明 2000. 『認知言語学原理』, くろしお出版.

山崎正和 2006. 『社交する人間 ホモ・ソシアリビリス』, 中公文庫.

Yoshida, J. and K. Takehana 2007. “The strategic advantage of ‘maritime tourism’ in Japan: On the perspective of local development policies and marketing of university,” 『大手前大学人文科学部論集』第7号, 21-33.

受付日 2009年1月26日

受理日 2009年4月6日